

(4) 文学と芸術教育部会

教育部会名	文学と芸術
部会長名／作成者名	山本 秀行
概 要 (2 ページ)	
(1) 組織・運営について ・文学と芸術部会は、国際文化学研究科・人文学研究科・人間発達環境学研究科の三局の教員によって以下のように構成されている。 部会長 (1 名) 幹事 (3 名) 部会員 (合計 26 名) 部会長 (任期 2 年) は国際教養教育院の全学会議に出席し全体の企画・調整にあたり、部会内へ全学共通授業科目の基本方針や学部からの要請など必要事項の周を行う。幹事 (任期 2 年) は各部局から 1 名、計 3 名が配置され、授業の企画・調整および成績の取りまとめに当たっている。開講に関して必要な事項は、部会長と幹事が協議して決定する。 (2) 実施状況について ・本部会は総合教養科目において「文学 A」「文学 B」「言語科学 A」「言語科学 B」「芸術と文化 A」「芸術と文化 B」を開講している。担当教員は、部会長と幹事が部会員の専門性を考慮して調整している。 「文学 A」(一単位×4) 世界にはさまざまな文学的伝統が存在する。それぞれの背後にある文化的背景やそれぞれの展開についての文学史的知識を学ぶとともに、すぐれた作品の味読を通して、文学作品を味わい楽しむ能力を高める。 「文学 B」(一単位×12) 長い歴史を持つ日本の文学について、その展開の多様性を理解し、各時代の背景や各ジャンルの特質を知るとともに、すぐれた作品の味読を通して、文学作品を味わい楽しむ能力を高める。 「言語科学 A」(一単位×4)「言語科学 B」(一単位×4) さまざまな言語の言語学的特質について学ぶとともに、言語と文化の関係の多様なあり方について多面的に考察し、言語という身近な存在がもっている文化的意味について理解を深める。 「芸術と文化 A」(一単位×10) 今日の芸術文化は、多岐・多様な様相をみせている。伝統の継承と発展、新たな創造と進化である。日本、西洋及び諸民族における芸術の展開と新しい文化形成について、音楽と造形の両分野から、理論的かつ実証的にアプローチを行う。 「芸術と文化 B」(一単位×12) さまざまなジャンルの伝統芸術について、その成立・展開の歴史を学ぶとともに、現代的意義を理解する。また、すぐれた芸術に接しながら学問的方法に基づく鑑賞の仕方を学ぶことにより、ゆたかな鑑賞力を養う。 (3) 課題について ・教育部会及び教養教育院における今後の課題 今後の課題として挙げられるのは、過年度と同様、1)クォーター制による授業実施に伴う問題、2)成績評価の是正、3)同一科目におけるシラバスのばらつき、4)オンデマンド型の科目の活用である。1)人文学という学問の性質上、文化・歴史的背景の解説、作品鑑賞やテキスト分析などに時間がかかるためにクォーター制による授業実施には様々な面での制約を伴うが、そうした制約を克服するための新たな授業方法等の開発と導入が必要であろう。2)については四割ルール (秀と優が合わせて四割以下) も担当教員の	

間で定着し、ほぼ順守されているが、比較的少人数の授業では受講者間の成績に差がつきにくい場合などがあり、担当者は苦勞を強いられている。3)については、授業の内容は個々の教員に委ねられており、実施の方法や指導内容などがそれぞれの専門と個性に基づいて行われているため、「目標」等の項目では特にばらつきが見られたので、今後、検討していくべきだろう。4)については、本年度も、ここ数年間で培った遠隔授業のノウハウを効果的に利用して、オンデマンド型の科目も開講することで、履修者のニーズと学習効果の向上を図る努力を続けるべきであろう。

（４）総合所見

前述のように、本部会としては、受講者のニーズと学習効果を向上させるために、新たな教育方法の開発と導入、同一科目のシラバスの統一、授業評価アンケート結果の分析と課題とそれに基づく授業改善への取り組みなど、様々な課題に対して取り組み、そうした各面においては一定の成果を得ている。

A 組織構成と運営体制について

- ①基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか（100 字程度）

人文系三部局に主配置あるいは配置されている教員で構成され、それぞれの教員の専門性に合致した科目を担当している。各部局から 1 名ずつ、計 3 名の幹事が部会長と協議して担当教員の手配やカリキュラムの調整を行なっている。2024 年度末の退職教員にも後任不補充（または補充時期未定）になる例も見られ、今後、このような例が頻発すると、実施体制・運営体制に支障をきたすことが危惧される。

根拠資料

教育部会構成員名簿

B 内部質保証について

- ①学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行っているか（100 字程度）

部会として、学期末には教務情報システム上で行われる、受講生による「振り返りアンケート」において、各担当教員に必要な応じて、学生の意見に対するフィードバックのコメントを行い、その結果を継続的に収集、分析し授業改善につなげるべく促している。

根拠資料

授業振り返りアンケート結果

- ②自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組が成果をあげている、又は計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか（150 字程度）

同一科目におけるシラバスのばらつきについて、部会長と各部局から選ばれた 3 名の幹事の間で、調整に向けて協議をする検討を進めている。その協議結果を踏まえて、各授業担当者に対して、シラバス作成時に「目標」等の項目での統一を図ることも考えている。

根拠資料

前年度までの自己点検・評価報告書、シラバス（今年度の工夫）

- ③授業の内容及び方法の改善を図るための F D を組織的に実施しているか（100 字程度）

本部会では 2023 年度にピアレビューを実施し、さらにピアレビュー意見交換検討会を実施して授業の改善を図ったが、2025 年度以降にも同様のピアレビューを行うことを検討している。また、部会として教養教育院主催の F D に積極的に参加するよう部会員に促している。

根拠資料

ピアレビュー（授業参観）実施に関するガイドライン、ピアレビュー実施科目一覧（教養教育委員会資料）

- ④教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるときともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか（100 字程度）

希望する教員には TA（ティーチングアシスタント）及び ST（スチューデントアシスタント）が配置され、それぞれの職分に応じた業務に当たっているが、予算の関係で希望する時間数を担当してもらえない状況である。そうした状況の中で、最大限の教育効果を得るために、ST/TA は事前に担当教員によるオリエンテーションを受けさせ、質の向上を図っている。

根拠資料

C 教育課程と学習成果について

- ①当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものであるか（100 字程度）

文学、芸術、言語など人文学の諸学域を扱いつつ、伝統と近代、日本と世界を繋いで多文化理解を促すものであり、総合教養科目の第一区分「多文化理解」の目標に合致している。

根拠資料
シラバス

- ②授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか（100 字程度）

本部会では、共通目標や学部からの要請、あるいは教養教育委員会での決定事項などは部会長から幹事を通じて各担当教員に伝えられ、到達目標をそれに沿ったものにする配慮を行っている。

根拠資料
シラバス

- ③授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか（100 字程度）

本部会では、授業科目の内容が基本的にはシラバスに沿ったもので共通目標や個々の到達目標を達成するものとなるように、部会長が各部局の幹事を通して、授業担当者に要請している。

根拠資料
シラバス

- ④単位の実質化への配慮がなされているか（100 字程度）

シラバスに成績評価基準を明記し、その基準をもとに評価が行われている。授業内のパフォーマンスや小テスト、レポート、期末試験など、各担当教員がそれぞれの教育目標のもとに受講学生の学修意欲を向上させ、単位の実質化を図っている。

根拠資料
シラバス、小テスト、レポート課題

- ⑤教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか（150 字程度）

「文学と芸術」部会は人文学という学問の性質上、講義科目が中心となるが、BEEF+を活用するなどして、大人数授業においても、こまめにレスポンスさせることが可能となったため、双方向的な学修指導が行われている。

根拠資料
シラバス

- ⑥シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、

事前・事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか（50 字程度）

シラバスの必須項目指定が增強されたこともあり、基本的に全ての項目が記入されている。しかし、一部の科目で入力期限を過ぎても未入力になっていた事例も見受けられた。今後はこうしたことがないように、各教員に徹底を図る。

根拠資料

シラバス

⑦学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか（100 字程度）

部会として、各教員に対して、シラバスの記載をより明確化することを徹底し、必要に応じて、シラバスに関連科目についての情報を記載することを奨励することによって、より多様な学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備する。

根拠資料

シラバス

⑧学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか（100 字程度）

各授業のシラバスにオフィスアワーを明記し、学生が相談しやすい環境を作っている。また、教務情報システムのメッセージ機能を使った学修相談も積極的に行うようことを部会として奨励している。

根拠資料

シラバス

⑨成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか（100 字程度）

本部会においては、秀を一割未満、秀と優を合わせた評価をほぼ四割以内に収めるよう、部会長から各部局の幹事を通じて、各教員に申し合わせ、ほぼ当初の目標は達成された。今後は、科目単位での成績分布が適正であることを各教員に確認をしてもらい、適正でない場合は、部会長が各部局の幹事を通じて当該の教員に改善を要請することも検討している。

根拠資料

シラバス、試験答案、成績分布（教養教育委員会資料）

⑩学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか（100 字程度）

振り返りアンケート結果によれば、受講生の大多数が授業を有益と評価し、内容を理解できたと考えている。同様に、受講生の大半がシラバスの掲げた学修目標に従って適切な学修成果が得られたと回答している。

根拠資料

試験答案、レポート、授業振り返りアンケート結果